兵庫教育大学附属小学校
校　長　冨　田　明　徳

Ａ３版

# 令和４年度　学校経営計画及び学校評価

## １　めざす学校像等　「人間として生き抜く力を育てる」　（伝統は革新の連続である）

○　学校像

先端的な教育環境のもとで，幼稚園，小学校，中学校の12 年間を通して，園児・児童・生徒，教職員，保護者が一体となって，地域社会と連携しながら，一人一人の子どもの学びと成長が保障される創造性豊かな学校をめざします。

○　子ども像

これからの社会において必要とされる情報活用能力を身に付けるとともに，主体的かつ対話的な教育活動を通して，心身ともにたくましく，未来を切り拓いていける知的創造力と寛容性を兼ね備えた，グローバル社会で活躍できる人間を育成します。

○　教員像

全国の自治体から附属学校園に派遣される教員が，附属学校教員としての自覚をもち，互いに敬意をもって高め合い，先進的で優れた教育実践に挑み，地元自治体の中心的な教員として活躍できる資質・能力の向上に努めます。

## ２　中期的目標（3 年間程度）

１　気持ちのそろった校内組織・教師集団づくり

（１）管理職による的確なガバナンスと管理職を含む教職員間の関係づくり

学校運営における様々なルールの明確化のための、学校運営管理規則の改善

管理職の理念浸透

（２）教職員間が互いに助け合い、多様性を認め、協力して同僚性を高めること。

管理職、ミドルリーダー、学級担任、特定教諭、非常勤講師がそれぞれの責任を果たす体制づくり。校務分掌の改善。

面談や指導を通して取組のベクトルをそろえるために、教員の業績評価を本格実施スタート。

積極的・意欲的で一体感のある教職員集団の構築をめざし、1 年目の教員も含めて担任団や校務分掌から学校経営計画の実現に向けた改善策や新たな取り組みが、積極的・効果的に提案される学校風土を醸成する。

（３）児童に対する取組みの成果を意識する。

良い授業の結果として、児童の測れる学力の向上をも検証するため年度初めと年度終わりに行う学力テストにより検証し、自己の授業を振り返り、授業改善やカリキュラム改善の参考とする。

（東京書籍の学力テスト 6 月と 12 月、及び全国学力学習状況調査の状況の分析検討）

２　大学との共同研究体制の確立

（１）「個別最適化」と「協働的な学び」の実現をめざし、「先進的」な授業改善に取り組む。キュビナドリル導入。

TOMOLINKS の実証実験に参加する

①大学教員の指導を受けて、教科部として授業力の向上を図る。

②研究授業及び授業検討会を実施。授業実践交流会の開催。

③研究大会を実施する。

（２）の共同研究の取組

①森山教授と永田教授の協力によるインテル STEAMLABO を活用した取組。STEAM 教育と教科に関する研究の取組。

②「理論と実践の融合」において石倉教授と入試制度改革を継続。

３　安全・安心な学校づくり

（１）新型コロナウィルスへのチーム対応を継続するとともに、校内の事故・けがの減少に努める。

（２）児童の学年段階に応じた生活規律や学習規律の検討と統一した指導。

（３）長期欠席者の理由を明確化し、適切なアセスメントと対応を図り、その減少をめざす。

（４）教科や特別活動、総合的な学習の時間等における様々な取組を通して相手の立場を考え、違いを認め合う集団を形成する。

（５）校内の児童や保護者への相談・支援体制を確立するとともに、子ども家庭センターや居住地自治体、警察等関係機関とも的確に連携する。

（６）チャレンジルームの効果的な活用

４　附属学校としての新しい文化の創造

（１）各教科の研究と学校全体のカリキュラムの整合性を図り、総合的な学習の時間や新たな研究に取り組む。

カーニバルとミュージカルの見直し。特にミュージカルを STEAM 教育と探求の観点から新しく創造する。

（２）働き方改革の推進

①附属学校で全国的な課題となっている働き方改革に積極的に取り組む。在校時間の適切な機械的な管理導入。会議の計画化、短時間化の定着。会議の開始時間と終了時間の明示。勤務時間外の会議の原則禁止。

②在籍 3 年を見越して、取組の継続・改善のため校務分掌見直し引継ぎ作業は 2 学期に行う。

③地元自治体の働き方改革のリーダーとなるタイムマネジメント能力獲得。

④3 年間の在籍期間を有効活用できるよう、短期間に附属学校の教員としての基本が理解できる仕組みを検討する。サポートブックを完成させる。

⑤新しい交流先との協定締結と計画的な拡大

（３）新しい教育活動、特別活動、学校行事の創造。

①STEAM 教育の理解を進め、STEAM ラボを活用した取組の推進。

②学校運営協議会を立ち上げ、コミュニティスクールとなる。

③チャイムの活用。時間を守る指導の徹底

（４）実地教育の改善・充実

附属学校任せになっている現状の改善、実地教育を大学の重要なカリキュラムであることの認識と、一層の DX 化も含めて充実した実地教育をめざす。

５　魅力的な学校づくりの推進

（１）子どもが真に授業を楽しみ自らの成長を実感できているか。保護者及び児童アンケートの改善・分析を行う。

（２）管理職が PTA 活動に積極的に協力し、保護者の理解や協力を得られるように努める。

（３）学校の改修工事の時期に合わせて、単なる改修に終わらず児童・教員・保護者のみならず地域にとっても、魅力的な学校となるように、図書館の魅力化と地域開放、STEAM ラボ等を活用した地域貢献をめざす。

（４）今後の定員削減も視野に入れながら、入試問題改革と合格基準の明確化を図り、本校のビジョンとミッションを踏まえて、本校に鑑み児童にとって意義のある入試制度を検討・研究する。

（５）学校間連携の推進

イベント的にしか行われていない。校種間連携については各自治体の方が進んでいる。既締結自治体との協定内容の見直しを進めながら、カリキュラムの一貫性や自治体ではまねのできない幼小の人事異動にも取り組めるように、幼小中の一貫教育のための人事配置の検討を進めるべきである。

３　今年度の重点目標と具体的な教育取組

| 中期的目標 | 今年度の重点目標 | 具体的な取組 | 評価指標 | 達成状況（5 段階評価） |
|---|---|---|---|---|
| 1<br>気持ちのそろった校内組織・教師集団づくり | (1)大学・管理職・教員の役割の明確化 | ①学校運営管理規則の徹底 | ①学長及び大学への適切な報告等、学則に沿った計画的な学校運営ができたか。 | (1)(達成状況　3)職員会議の位置づけや報告、許可等校則に従った学校運営については、大きく改善することができた。 |
| | (2)教員や PTA に対する管理職の理念浸透と管理職を含む同僚性の醸成 | ①理念浸透<br>保護者向け学校だよりの発刊<br>教職員向け校長通信の発刊。<br>②教職員の人事評価制度本格実施<br>・教職員が管理職評価する制度<br>・教職員からの提言シートの実施<br>・ミドルリーダー等の新たな配席によって、教職員間のコミュニケーションを充実させミドルリーダーの成長を図る。<br>・教頭席を職員室にすることによる管理職との風通しの良いコミュニケーションの増加。 | ①学校だより(月 1 回以上)<br>校長通信(月 2 回以上)<br>②人事評価制度の本格実施<br>・調査内容の改善・評価の数値改善・提言増加<br>「職場アンケートデータ」<br>職場内人間関係の肯定的評価の向上（R3 年度 61.5%）<br>（目標 80%以上）<br>困った時管理職に相談する<br>（R3 年度 20.6%）<br>（目標 30%以上） | (2)（達成状況　3）<br>①学校だよりの月 1 回以上発信は達成<br>校長通信月 2 回以上についてはできない月もあった。<br>②人事評価制度の本格実施は達成<br>・教職員による管理職評価と教職員の提言シートについては形式を変えて実施<br>・具体的な提言に基づき改善の具体策を検討。<br>「職場アンケートデータ」<br>職場内人間関係の肯定的評価の向上<br>（R 4 年度 69.2%）<br>困った時管理職に相談する<br>（R 4 年度 57.7%） |
| | (3)教員の指導実態と子どもの学力実態の把握と改善 | ③学力テストを年 2 回できるよう、 東京書籍に変更して実施。<br>教員がその間の指導状況を自覚できるようにする。 | ③教科担任制のもと、授業を担当した児童の学力状況<br>児童アンケートで教科が好きな率の向上（80%） | (3)（達成状況　3）<br>教科が好きな児童の割合は向上 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 2<br>大学との共同研究体制の確立 | (1)「個別最適化」と「協働的な学び」の実現をめざし､「先進的」な授業改善に取り組む。<br><br><br><br><br><br><br><br><br><br>(2)大学との共同研究の取組 | ①個別最適化の一助として「キュビナドリル」を導入有効活用<br><br>②授業実践交流会、研究発表会の実施<br><br><br><br><br><br><br>③教科部教員と大学指導教員の明確化。学長に全面的な協力依頼。<br><br><br><br>①STEAM 教育の理解を進め、STEAM ラボを活用した取組を推進する。<br>STEAM 研究に向かう雰囲気の醸成を図る。<br>②「理論と実践の融合」を活用して、石倉教授と入試制度改革を継続。 | ①キュビナドリルの活用状況。<br><br>②授業実践交流会<br>研究発表会の実施<br><br><br><br><br><br><br>③大学教員の協力状況<br>訪問回数<br><br><br><br>①STEAM 研究の広がりと進展拡大。指定された取り組みができたか。<br><br>②入学後も活用できる適切な入試制度への改善ができたか | （1）（達成状況　3）<br>①キュビナの活用状況<br>学年、学級、教科、個人によるばらつきが大きく、改善方法の検討が必要。<br>②授業実践交流会（1・2 学期各 1 回）と研究発表大会（2/4）の実施<br>研究発表大会を地域貢献･働き方改革という新しいコンセプトで行った。予想以上の参観者があった。<br>③大学教員との連携強化・改善<br>加東市との連携が始まった。<br><br>（2）（達成状況　4）<br>①森山教授の研修会実施（4 月）<br>②取組はまだ個人レベルだが、確実に進展。<br>（視察；令和 4 年 7 月インテル、令和 5 年 1 月文科副大臣）<br>②入試制度の改善が進んだ。就学指導委員会の位置づけと内容、回数を改善した。就学前施設との連携推進のため新たに入学準備委員会を設置した。 |
| 3<br>安全・安心な学校づくり | (1)新型コロナウィルスへの対応。<br><br><br><br><br><br><br><br><br><br>(2)校内の事故・けがの減少<br><br><br><br>(3) 児童や保護者の相談・支援体制を確立。子ども家庭センターや居住地自治体､警察等関係機関とも的確に連携する。 | ①教員による協力体制のもと対応チームを流動的に編成する。ご家庭による検温の徹底。<br>②あらかじめ発生時についての対応を検討をしておく。<br><br><br><br><br>③ICT 活用による円滑な学習支援<br>特に学級閉鎖時等<br><br><br>①生徒指導部による校内ルールの徹底<br><br><br><br>①長期欠席者の適切なアセスメントと対応を図る。関係機関への通告を恐れない。カウンセラーの的確な活用。校務分掌の改善 | 保護者アンケートによる<br>①緊急対応の状況の的確さ<br><br>②対応基準が､保護者や教員に徹底できたか。<br><br><br><br><br>③保護者肯定的評価<br>教員肯定的評価<br><br><br>①校内のけがの減少<br><br><br><br>①相談状況 | （1）（達成状況　3）<br>①陽性患者等がなかなか減らず､学級閉鎖等の緊急措置を的確に実施した。<br>②通知文を発出するとともに HP にも対応を掲載し、保護者・教員への徹底を図った。<br>保護者肯定的評価　90.7%<br>教員肯定的評価　　95.0%<br>③学校はタブレット等を効果的に活用できているか。保護者肯定的評価　80.0%<br>教員肯定的評価　　50.0%<br>（2）（達成状況　5）<br>①　病院受診が必要な怪我等の大幅減少<br>R 2 年度 69 件、R 3 年度 40 件、R 4 年度 17 件<br>（3）（達成状況　3）<br>学校の先生やカウンセラーたちは、相談しやすいか　保護者肯定的評価 94.8% |
| 4<br>附属学校における新しい文化の創造 | (1)新しい特別活動の創造<br><br><br><br><br><br><br><br><br><br>(2)働き方改革の推進<br><br><br><br><br><br><br><br><br>

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 5<br>魅力的な学校づくりの推進 | (1) 子どものための授業、学校運営の推進。 | ①楽しく、誰もが自らを表現できる参加しやすい授業になっているか。成長を実感できる授業や取組となっているか。<br>②保護者・児童アンケートの学校運営への反映・改善実施、説明責任を果たす。 | ①学校教育自己診断結果のアンケート結果の改善<br>・授業が楽しいという子どもの増加（再掲）<br>②実施できたか | (1)（達成状況　4）<br>昨年度は校長による学校教育に関するアンケートを実施したが、今年度教務部により作成・実施・分析を行った。 |
| | (2)3 期工事による施設設備の魅力化 | ①図書館の魅力化と地域開放、みんなの広場づくり等地域貢献をめざしコミュニティスクール化を図る。<br>②STEAM ラボ等を活用した取り組みの推進 | ①安全な工事と先進的な施設建設への協力。加東市との連携強化。学校運営協議会の設立<br>②STEAM ラボ等を活用 | (2)（達成状況　3）<br>①工事は遅れたが、安全に実施できた。研究大会を通して加東市との連携を強化した。学校運営協議会は年度内に設置予定である。<br>②取組はまだ個人レベルだが、確実に進展。（視察；令和 4 年 7 月インテル、令和 5 年 1 月文科副大臣）再掲 |
| | (3)入試制度の改善<br>学校間連携 | ①昨年度変更改善した入試問題を、石倉教授と「理論と実践の融合」において入試制度改革をさらに発展させる。入試を選抜のためだけではなく。後の指導に役立つものとすること。<br>②連携のきっかけとして附属学校教員が一堂に会した合同辞令交付式を実施する。<br>③学校園間の人事交流を模索するなど具体策の検討。 | ①特別支援体制の一層の充実、市町村福祉部門との連携拡大。<br>②合同実施できたか。<br>③小中両方の免許を有する者の確認と可能性を探る。 | (3)（達成状況　3）<br>①　特別支援コーディネーターを中心に学習指導員の充実及び運用により、昨年度より特別支援教育体制は充実した。<br>就学指導委員会の在り方は改善できた。<br>②合同実施できた。<br>③附属学校間での人事交流等の取組は進展しなかった。 |
| | (4)教職員がミドルリーダーとして成長する学校づくり | 県教委及び市教委の指導主事や、主幹教諭、指導教諭等で活躍できる、自らの専門性等を伸長できる学校づくり。 | 自治体を支えるミドルリーダー教員の育成、大学院進学希望者の増加と希望の実現 | (4)（達成状況　4）<br>大学院在籍者 4 名に増加<br>市教委指導主事への異動 1 名 |

## 4　第 3 者評価の総評

**浅野先生と学校経営コースによる**

**1　兵庫教育大学附属としての質の高い授業による学力保障**

限られた時間ではあったが、参観させていただいた多くの授業において、「児童の主体的・協働的な授 業の実施」・「児童の好奇心を刺激する課題の工夫」が見られた。冬季休業明け直後にも関わらず、子ども達が落ち着いて学習に取り組み、自分の考えを積極的に発言したり、友だちと相談したりしており、大学附属校としてふさわしい、児童の「知りたい・調べたい」を刺激する先導的な学びが実践されていた。特に、意図的にではないにも関わらず、理科等において附属中学校が目指している「国際バカロレア教育」にも似た学習が展開されていたことは大変興味深く感じた。また、昨年度、使い方のルール等で課題が見られたと伝え聞いていたタブレット等の ICT 機器活用に関しては改善が見られ、授業内で効果的に活用されていた。日々、STEAM 教育等、質の高い学習の提供に向け、たゆまなく研究と改善に意欲的に取り組んでおられる先生方の努力により、子ども達がいきいきと学習に取り組むことができているのだと感じた。

**〈さらなる高みを求めて〉**

調査において、全国学力・学習状況調査の結果が、ここ数年芳しくないとのことであった。**学力保障は、学校において最大の責務**であり、附属小学校においても教科間の連携を中心に取り組まれていると感じたが、今回の訪問では、**学校としての授業改善や学力保障の取組については窺い知ることができなかった。**それぞれの教科の専門性と、小学校教員ならではの教科横断的な考え方を上手く活用し、**学校としての授業改善と学力保障に向けた取組の充実を早急に図っていくことの検討**を願いたい。また、附属中学校はもちろん、他の中学校とも連携を図り児童の将来の進路を見据えた学力向上の取組に期待したい。

**2　多種多様な個へ合わせた指導**

附属小学校では、通級指導等は行われているものの特別支援学級はなく、いわゆる通常学級内で、多種多様な子ども達が学習に取り組んでいた。校長、教務、生徒指導主任への聞き取りから、そこに指導の困難さはあるものの、学習支援員の配置等によって、個によりそった学習・生徒指導が行われているということだった。校内の見学においても、教職員の指導の基、児童は安心感をもって伸び伸びと学校生活を楽しんでいる様子が見受けられ先生方の苦労と努力を感じると同時に、その指導のあり方は大変参考とな った。特に、生徒指導のあり方については、院生の中でも「個を尊重した指導のあり方」という考えと「学力・生活力等の力をさらに高めるためにももっと厳しく指導をすべき」という意見の２つの見解に分かれた。今後の動向に学びを得たいと考える。

**〈さらなる高みを求めて〉**

子どもの人権保障、体罰等の観点から大きく変換を求められている生徒指導において、多種多様な児童を受け入れ**個を尊重した指導を行っている附属小学校の今後の在り方は大変興味深い**。しかしながら、学校として指導方針を決定し、全職員で取り組んでいるというよりは、個々の教職員に委ねられており、その結果現在の様な指導体制になっていると考える。**育てたい児童像を全職員で共通理解し、学習・生活指導に取り組んでいくことで、インクルーシブ教育、新しい形の特別支援教育等のモデル校として、発展の可能性を秘めている**のではと感じた。また**危機管理の面においても、統一した指導を全職員で行っていくことは重要**だと考える。

**3　兵庫教育大学附属校としての在り方の検討**

これまで述べてきたように、学校訪問では、児童が元気いっぱいに伸び伸びと学校生活を送る姿をたくさん見ることができた。それを支えている先生方も、それぞれの専門性を活かし、はつらつと児童の指導 にあたっていた。教職員がいきいきと働いてこそ、大学附属校として児童に先端的で質の高い学習を提供できると考える。これも冨田校長が着任以来、あたたかいリーダーシップを発揮し、教職員のつながり和を大切にしながら、単に労働時間短縮のみに着目するのではなく、働きやすさを重視した業務改善等学校運営に取り組まれてきた成果によるものだと感じた。

〈さらなる高みを求めて〉

配布していただいた、令和４年度学校経営計画には、しっかりとめざす学校像、重点目標等が明記されていたが、残念ながら今回の施設見学やインタビュー調査からは、**個々の素晴らしい取組は拝見できても、学校としての取組を窺い知ることができなかった**。学校の核となる部分について、職員はもちろん**兵庫教育大学附属校として、幼・中・大学の関係者としっかりと協議し足並みをそろえた取組を充実させて いく**ことで、学力面・生徒指導面のみならず、学校像としてかかげている幼・小・中、12 年間を通した 大学附属校としての取組をさらに充実させていくことができると考える。

【総評】

多種多様な児童に合わせた学習・生徒指導の取組は大変画期的であり、また職員の得意を活かした質の高い授業指導は、大変多く学ぶべき点があると感じた。その反面、**場合によっては担任、教科間任せと捉えられる組織体制や、施設の立地条件を活かせていない小・中連携の辺りに学習・生徒指導面の課題**を感じた。今後、兵庫教育大学附属として幼・小・中が足並みをそろえ、発達段階に応じた適切な指導に取り組んでいくことができるよう、**早急に組織的な連携体制作りへの検討を期待したい**。 最後になりましたが、冬季休業明け大変お忙しい中、学校訪問調査の機会をいただき、多くの学びを得ることができたことを感謝いたしますとともに、兵庫教育大学附属小学校のさらなる発展を祈念申し上 げます。